

だから、獅子文六は、文学青年を身边に集めたり、面倒を見たりしなかったのだ。

ところが、開戦以来、青年を見る目が変わってしまった。

自分でも、驚くほど電車や街路の若者に惹かれていた。

みんな、貧しい服装をしているのに、清々しい。

清々しく見える。

(精神的に美しい顔だちをしているなあ)

思わず、感心してしまう。

先日、千駄ヶ谷で、市電から道路に飛び下りた青年に、自転車にのった若者がぶつかった。

これは、喧嘩になるな……

だが、電車から降りた青年は、緊張した顔はしていたものの、自転車とともに倒れた青年を抱き起こしたのである。

自転車の青年は、やや怒気を帯びていたが、起き上がると、軽く頭を下げた。

それを見た相手も、頭をさげ、そのまま別れた。

(偉いもんだな、二人とも……)

そんな時に、真珠湾への潜航艇による特別攻撃の報に触れたのだ。

死ぬ事が分かりきっているのに、小さな船で、敵に向かって行った九人の下士官に、滅法感心してしまった。

フランス事しが長く、個人主義に徹底的に染まっていた獅子文六は、彼等の犠牲的行為に深く感動してしまったのだ。

新聞で、彼等の記事を見ると、一、二行で、涙が滂沱とし

騒動を惹き起こすかもしれない。

下手をすれば、一度と帰国がかなわないような羽目に陥るかもしれない。

なにしろ、徴用文士は、軍隊教育でスジガネを入れるというのだ。

「そんなもの、軍人に入れてもらわなくても、俺はもともとスジガネ入りだ」

とは威張ってみたものの、徴用は御免だった。

それで、朝日新聞の要請に応じたのだけれど、戦争中だから、どうしても連載の内容は制限されると、学芸部長は云う。

「大東亜戦記みたいなものをお書きいただけませんか」

前線にも行ったことがない、まるつきり戦争の体験もない、自分に戦記なんてものが書けるだろうか。

火野葦平だったら、いくらでも書けるんだろうが……

戦争どころか、教練すら参加したことのない自分に、どうやったら戦争が書けるのだろう。

真珠湾に突入した下士官の事なら、書けるかもしれない

……

皇 「いいですね、それで行きましょう」

天 学芸部長は、即座にとびついた。

和 「いや、九人全部を書くのは、僕の手には余る。一人を選ばしめてくれないか」

昭 鹿児島出身の下士官、横山正治を主人公にする事にした。

て流れてくる。

(一体、どうしちまったんだろう。自己犠牲の精神なんて、まったく自分には関わりのないものだったのに)

「軍神」という言葉には、どうしても馴染めなかったが、新聞紙上に掲げられた、彼等の、あどけない、素直な顔を見ると、堪らない気持ちになった。

「そんな、人情家だとは思いませんでしたわ」

妻に、毎日、冷やかされた。

「人情じゃないよ。真実に偉いと思ってるんだ。偉い、偉いんだよ、この連中は」

獅子は、九人の名前を諳んじただけでなく、各人の郷里や性格なども頭に入れていた。

新聞は、大仰な報道もあったものの、注意深く読んでいれば、だいたいは把握できた。何しろ、小説家なのだから。

彼等は、みな、豪傑でもなければ、秀才でもなく、平凡な、どこにでもいる青年たちだった。

その平凡な青年が、自らの命をかけて、潜航艇に乗り込んだ事に、獅子は、深く深く心動かされたのだった。

獅子は、朝日新聞から、連載小説を依頼されていた。

新聞小説を書いている間は、徴用が免除されるという噂が、出版界に流れていた。

開戦以来、すっかり愛国者になった獅子は、国のために尽くす気持ちは多かつたものの、徴用は嫌だった。

病弱持ちだったので、低劣な下士官などともめて、大きな

鹿児島は、前作『南の風』の舞台になった場所で、かなり土地勘があった。

そのうえ、鹿児島人が獅子は好きだったのである。

朝日新聞は、取材の手助けに、ヴェテランの海軍記者をつけて、取材旅行に出してくれた。

呉軍港では、何の成果もなかった。

戦争中なので無理もないが、これでは小説が書けない。

ところが、江田島の海軍兵学校を参観して風向きが変わった。

「こんな純白で、清冽な学校がこの世にあるものだろうか」規律、規則が大嫌いな自分が、規則すくめの学校に感動するのが不思議だったが、いくら理屈をつけても、感じている自分を否定することは出来なかった。

生徒たちが、軍帽に白い作業を着て運動場に駆け込んで来るのを見るだけで、涙が出てくるのだ。

鹿児島で、モデルとなった中尉の生家を訪ねた。

場末の小さな米穀店だった。

父親は、すでに死去して、母親と兄の二人きりの所帯だった。

一日中、弔問客が押し寄せていた。

天皇皇后陛下の供花があり、女学生が寄せた血書の手紙もあった。

誰が打ったのか、「軍神の生家」という標杭が立てられていた。